

環境問題の先駆者（3）

- * 神の信託管理人思想
 - * ウォルター・C・ラウダーミルク (1888~1974)
 - * 第十一戒「汝、聖なる大地を、忠実なる僕 (steward) として神より相続し、世代を次いで、その資源と生み出す力とを守るべし」。
- * 生命中心主義
 - * 生命あるいは生態系が最優先される。人間の価値は相対化される。
 - * ディープ・エコロジー
- * 動物権主義
 - * 「動物の解放」運動

2. キリスト教と環境問題

キリスト教と自然

- * 道徳的指標としての「自然」
- * 野蛮としての「自然」
 - * 「黒人のもとでの奴隷制度のありかたからみちびきだせる、わたしたちにとって興味のある唯一の教訓は、自然状態というものが絶対の徹底した不法の状態である、という理念の正しさです」 (ヘーゲル『歴史哲学講義』)
- * 自然は人間によって支配されるべき対象。

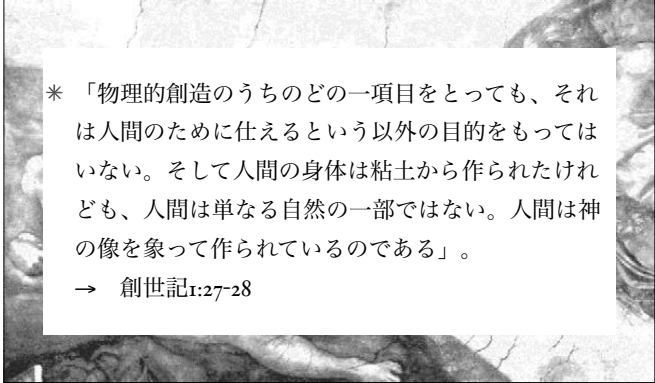
原生自然に対する態度

- * キリスト教的伝統の中では、「原生自然」 (wilderness) は、呪われた大地、楽園の対極と見なされた。
- * 「原生自然」やそこに生息する野生動物に対する適切なキリスト教的態度は「征服」「鎮圧」であった。

キリスト教の生態学的責任

- * リン・ホワイト論争
 - * 1967年、リン・ホワイト・ジュニア「今日の生態学的危機の歴史的源泉」
 - * 生態学的危機の原因は、キリスト教の人間観・世界観にあると指摘した。

リン・ホワイトの主張（1）

- 
- * 「物理的創造のうちのどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもっていない。そして人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は神の像を象って作られているのである」。
- 創世記1:27-28

リン・ホワイトの主張（2）

* 「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも人間中心的な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、人と自然の二元論をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」。

リン・ホワイトの主張（3）

* 「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう」。

3. 環境問題に対する キリスト教の応答

- 1) 神の信託管理人思想の展開
- 2) 自然理解の再解釈
- 3) 基本概念の拡張
- 4) フェミニスト神学からの問題提起
- 5) 「動物の神学」の形成
- 6) 米国・福音派における環境意識の向上

1) 神の信託管理人思想の展開

* ジョン・パスモアは『自然に対する人間の責任』の中で、キリスト教の伝統の中には、自然の支配者としての人間のイメージばかりでなく、自然のstewardとしての伝統もあることを示し、「スチュワード精神」（stewardship）の概念を導入した。

2) 自然理解の再解釈

- * ゲルハルト・リートケ（旧約聖書学）ら聖書学者は、エコロジーの視点から聖書を解釈し直した。
- * 自然と人間の関係を問う際に、創世記の冒頭（創造物語）だけに注目するのではなく、他の箇所（詩編、ヨブ記、箴言など）にある自然描写の多様性に目を向けさせた。

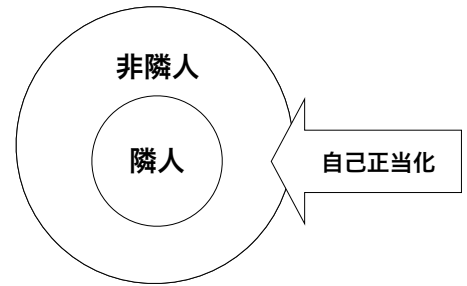
創世記 1 – 9 章

- * 「神はこれを見て、良しとされた」（1:10等）。
- * 「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（2:7）。
- * ノアの物語「わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」（8:21）。「あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる」（9:9）。

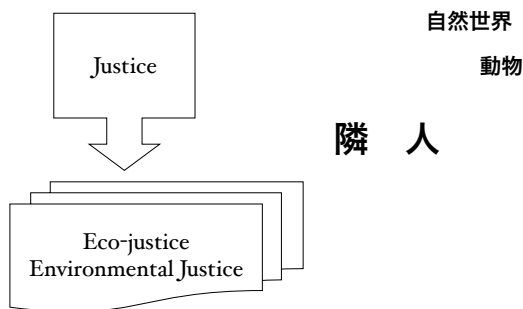
聖書の中の多様な自然理解

- * 詩編8、104、148編
- * 被造物と神との緊密な関係を描写
- * 新約聖書（ロマ8:18-25、コロ1:15-23、一コリ15:20-28、エフェ1:10）
- * 「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」（ロマ8:22）

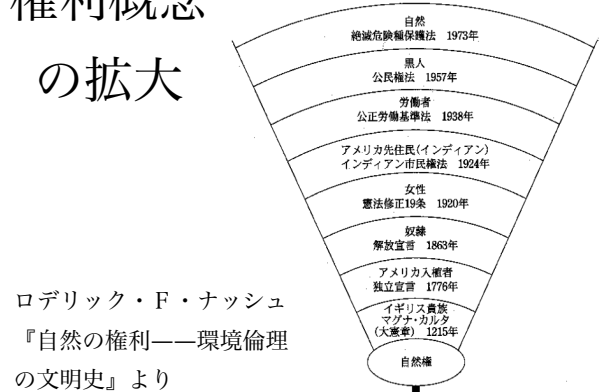
3) 基本概念の拡張



「隣人」「正義」の拡大



権利概念の拡大



ロデリック・F・ナッシュ
『自然の権利——環境倫理の文明史』より

図2 権利概念の拡大

4) フェミニスト神学からの問題提起

- * エコ・フェミニズム
- * 人間による自然支配と、男性による女性支配の間にアナロジー（類比関係）を見出す。
- * 黙示文学的終末論への批判
- * 現在の自然環境は破棄され、新しい天地が到来するという考え方は反エコロジカルではないか。
- * 生と死の二元論への批判
- * 「最後の敵として、死が減ばされます」（一コリ15:26）
- * 生と死の不可分性：食物連鎖、アポトーシス

5) 「動物の神学」の形成

- * 動物の権利をめぐる議論
- * 動物のための礼拝（1970年代以降）
- * 聖書の動物観の一例
- * 人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところにいく。すべては塵から成った。すべては塵に戻る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。（コヘレトの言葉3:19-21）